

## 活動状況報告（3月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

日差しの無い暗く厳しい冬が終わり、ポーランド・ワルシャワに春が訪れました。街では桜の木々が見られ、時折日本の美しい風景を思い出しています。ロシアによりウクライナ侵攻から約1ヶ月が経ちました。たくさんの方からご心配の声をいただきますが、幸いなことに私は安全に過ごしております。ポーランドは、欧州の中でもかなりの対露強硬の姿勢を貫いていると思います。ウクライナへの人道支援もしており、首都ワルシャワの人口を超える、約200万人もの難民を受け入れています。街中では、ウクライナのパスポートを持ち疲れ切った表情の人々を見かけ、彼らを想うと胸が張り裂けそうになる毎日です。

夏学期開始から早くも1ヶ月が過ぎ、いよいよ修士課程の修了に向けた準備に本腰を入れなければならなくなりました。9月に修士論文の提出と90分のピアノ試験があります。今月はこれらに集中し特に時間を割いていたので、この2つの内容からご報告したいと思います。

まずピアノの試験の為のレッスンですが、今月は沢山の曲を学びました。ソロのレッスンでは、ショパン(1810-1849)のノクターン作品9の3、マズルカ作品59の1(ポーランドの民俗舞曲のこと。3拍子で、2拍目や3拍目にアクセントがある。)、即興曲作品51(※ピアノ独奏用の自由な形式で書かれた抒情的小品)です。その中でもショパンのノクターンを中心的に勉強したので、今回はこの作品について書き残したいと思います。ノクターンとはゆっくりとしたテンポで、形式や内容が自由なロマン派の小品のことを指します。アイルランドの作曲家であるジョン・フィールド(1782-1837)が創り出し、ショパンがこの小品を十分に音楽として完成させたのではないかと思います。ショパンは、生涯で21曲のノクターンを作曲したのですが、この作品9の3が一番規模が大きく、個人的には一番美しい作品だと思っています。また、ノクターンの性格としては珍しく、scherzando(※おどけて、たわむれるようにの意味)というショパンからの指示があります。この作品について教授からは特に、「ショパンがとても細かく記譜しているのだから、それを絶対に守ること。その細かなスラー(※音と音を滑らかにつなげて演奏することを指示する演奏記号のこと)を正確に表現するためには、腕や手のジェスチャーが重要」と教えていただき、スラーの切れ目やつなぎ目での腕の上げ下げ等の動きを見直しました。このように少し腕の動きを変えるだけでとても弾きやすくなり、またとても美しく表現できるようになり、流石はショパン自身が優れたピアニストだっただけあるなと思いました。作品の殆どがピアノを弾きながら書かれていたようで、彼自身がピアノや体の事をよく分かっていたのでしょう。自然に手を動かせば、その先にきちんと音があり、無理なく演奏できるのです。ショパンの作品を中心に研究されている先生なのでとても厳しいのですが(なんと彼の作品のほとんどを暗譜で弾けるほど!)、曲の構成、和声に合わせたペダルの調整、旋律の歌い方、指使い等たくさんのことを学びました。

そして、室内楽のレッスンについてです。今月からモーツァルト(1756-1791)のヴァイオリンソナタ ト長調 K301 を勉強し始めました。こちらに来てから、もっぱらポーランドの作曲家、特にロマン派の作品を中心に勉強しており、古典派の音楽から遠のいていたので、先生が課題としてくださったのでしょう。いわゆる個人的感情の表現を重視するロマン派の音楽を好んでいる私にとって、均整の取れた様式美を重視する古典の音楽が窮屈に感じていたのですが、「モーツァルトだって私たちと同じ生活をしていたし、私たちと同じ感情があった。特にこの作品は、彼のジョークが楽譜から見えてくる」と先生に教えていただき、私の認識は間違っていたように思えまし

た。この作品は2楽章形式で、第1楽章はソナタ形式、第2楽章はロンド形式(※古典派のソナタの終楽章などに度々登場し、繰り返されるテーマと、その間に挿入されるエピソードからなる形式のこと)になっています。教授から特に指導されたのは、①強弱の差をしっかりと表現すること、②休符も音楽のうち、という2点でした。この作品は特に、突然フォルテからピアノになったりと、とてもコミカルでチャーミングです。そして、休符がとても効果的に活用されています。そして私は、休符を少し短く感じて演奏する癖があるので、今月はよく指摘されていたと思います。これらをきちんと意識して演奏することで、私自身も楽しいし、きっと聴衆にとってもこのソナタの良さが伝わるでしょう。このモーツァルトのソナタについてはまだまだ勉強すべきことがたくさんあるので、パートナーとよく対話しながら練習をしていきたいと思っています。

最後に、修士論文について少し触れたいと思います。ポーランド発祥のポロネーズという舞踊・舞曲があるのですが、その起源や歴史、ポーランドの作曲家たちが遺したピアノ分野におけるポロネーズについての比較をしていく内容にしました。ポーランド人にとってポロネーズはとても身近なもので、高校生の卒業式でこれが踊られるそうです。ポーランド人の同級生が演奏するポロネーズのリズム感にはいつも圧巻され、いかに彼らにとって大切なものなのかが納得できます。きっと体に自然と備わっているのでしょう。せっかくそんな素晴らしい環境にいるのだから、ポロネーズについてとことん研究してみよう！と思い選びました。他の同級生が研究する内容に比べて圧倒的に文献が少なく、英語・ポーランド語で資料を読む毎日ですが、ネイティブの専門家がたくさんいる環境をたくさん活用していきたいと思っています。少しずつご報告していきたいと思いますが、帰国した際に皆様にこの研究内容を発表できるよう頑張ります。

新型コロナウイルスと戦争という激動の中学年でありますが、自身の健康と安全に気をつけて研究を続けていきたいと思っています。皆様の温かいご声援を引き続きお願いいたします。

